第１章　松江市の概要

１．自然的・地理的環境

１）位置

松江市は、島根県東部に位置する県都であり、山陰地方のほぼ中央（東経 133 度４分、北緯 35 度 27 分）にあります。市域は東西 41 km、南北 31 km、面積は 572.99 ㎢です。

２）地形・地質等

松江市北部に位置する島根半島は、日本海に面し、大山・隠岐国立公園の指定を受けた美しいリアス式海岸と、宍道湖北山県立自然公園の指定を受けた緑豊かな北山山系から形成されています。

島根半島の海岸線は、名勝及び天然記念物潜戸、名勝美保の北浦、天然記念物多古の七ツ穴、天然記念物築島の岩脈などに代表される断崖と緑豊かな自然が遠景の空や海と対照的で雄大な自然景観を形成しています。神話的風情を伝える景勝地もあり、自然美に神秘的な雰囲気を加え、凛々しさと神々しさに満ちた独特の景観を醸し出しています。

北山山系は、朝日山、枕木山、大平山などからなる 200m～500m の山地であり、松江市中心地より俯瞰すればそれほど高くない山頂が連続し、宍道湖・中海や市街地の背景となる均整の取れた山並み景観です。

松江市の中央部には、ラムサール条約登録湿地の指定を受けた汽水湖である宍道湖・中海があり、両湖を結ぶ大橋川が市の中央を東西に流れています。

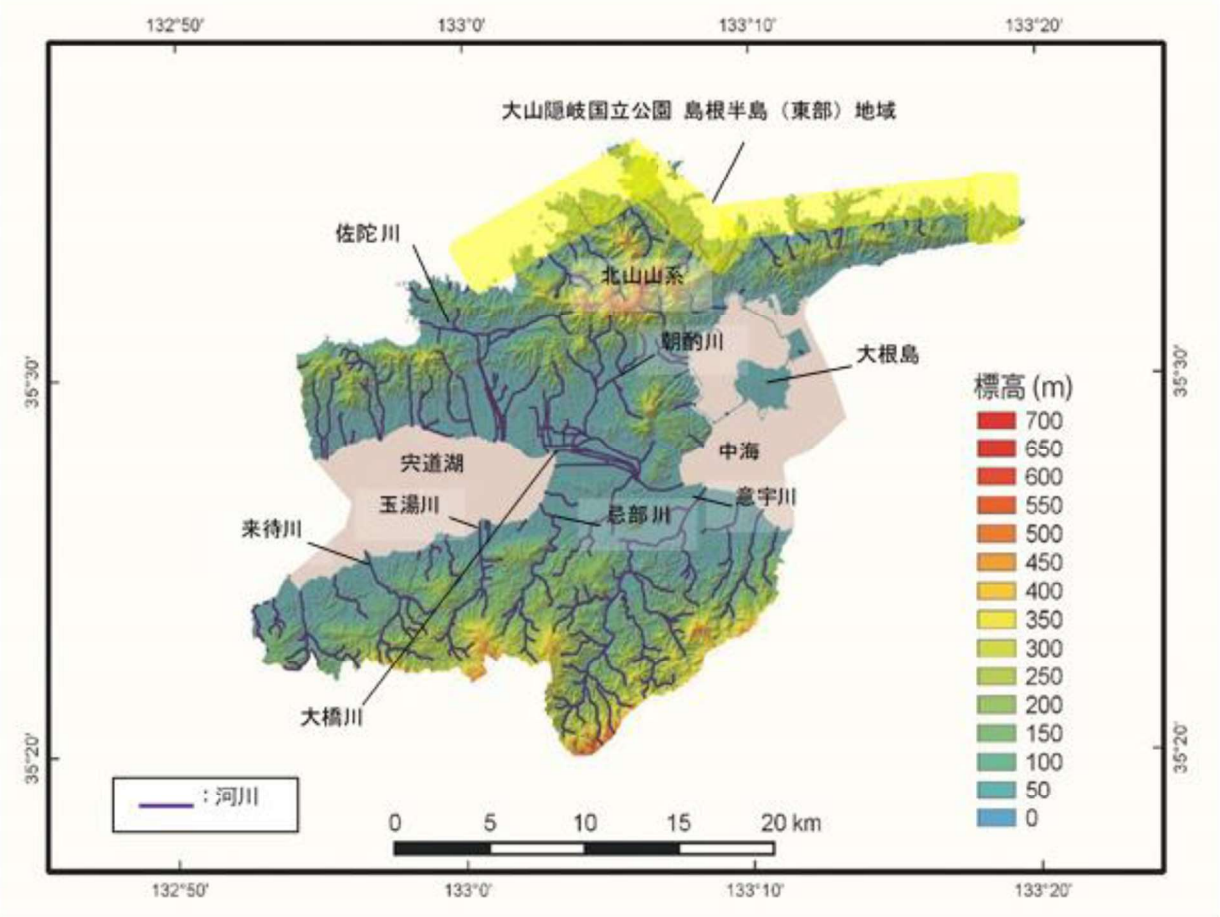
宍道湖は、日本で７番目に大きな湖です。今から約 7,000 年前～6,000 年前の縄文海進と呼ばれた時期には、海面は今より１m ほど高くなり、中海から松江市街、宍道湖、出雲平野は一連の海峡でした。その後海面は徐々に低下し、また、主に斐伊川からの堆積物や約 4,000 年前の三瓶火山の噴火による噴出物の供給により出雲平野が急速に拡大していきました。約 2,000 年前以降、宍道湖や中海は現在とほぼ同じような形になりました。斐伊川の本流は古来、出雲平野西の神門水海をへて日本海へ注いでいました。その後、遅くとも中世末期頃までには東の宍道湖に注ぐようになっていましたが、近世以降に大規模な堤防の築堤工事が行なわれることによって、現在のような流路に整備されました。

外海と隔てられた汽水湖は、現在大橋川、中海を経て日本海に繋がっています。海水と淡水が交じり合う環境は、日本一の生産量を誇るシジミを始めとして魚介類が豊富で、その四季折々の味覚は宍道湖七珍と言われます。冬はコハクチョウなど多くの水鳥が渡来します。湖面と空で占められる穏やかで広々とした空間は、松江に開放的な印象を与え、湖面に浮かぶ嫁ケ島と夕日は水都・松江を代表する景観となっています。

大橋川は、宍道湖の東端から松江市の中心部を抜け中海へと注ぐ一級河川で、全長 7.6 km、流域面積は 13 ㎢を測ります。

中海に浮かぶ大根島は約 19 万年前に陸上で噴火してできた玄武岩の火山ですが，この島には特別天然記念物に指定されている大根島の熔岩隧道（幽鬼洞）と、天然記念物の大根島第二熔岩隧道（竜渓洞）があります。

松江市の南部には、中国山地に至る 200mから 600m前後の緑豊かな山々が広がり、平野部の豊かな水田地帯が美しい農村景観を展開しているほか、玉造温泉をはじめとする温泉資源にも恵まれています。



松江市の地形、標高図

3）気象

松江市の気候は、日本海側気候の特徴が見られ、夏季は湿潤で、冬季は豪雪になり易い気候です。年間平均気温は 15.2℃、年間降水量は 1,791.9mm です。

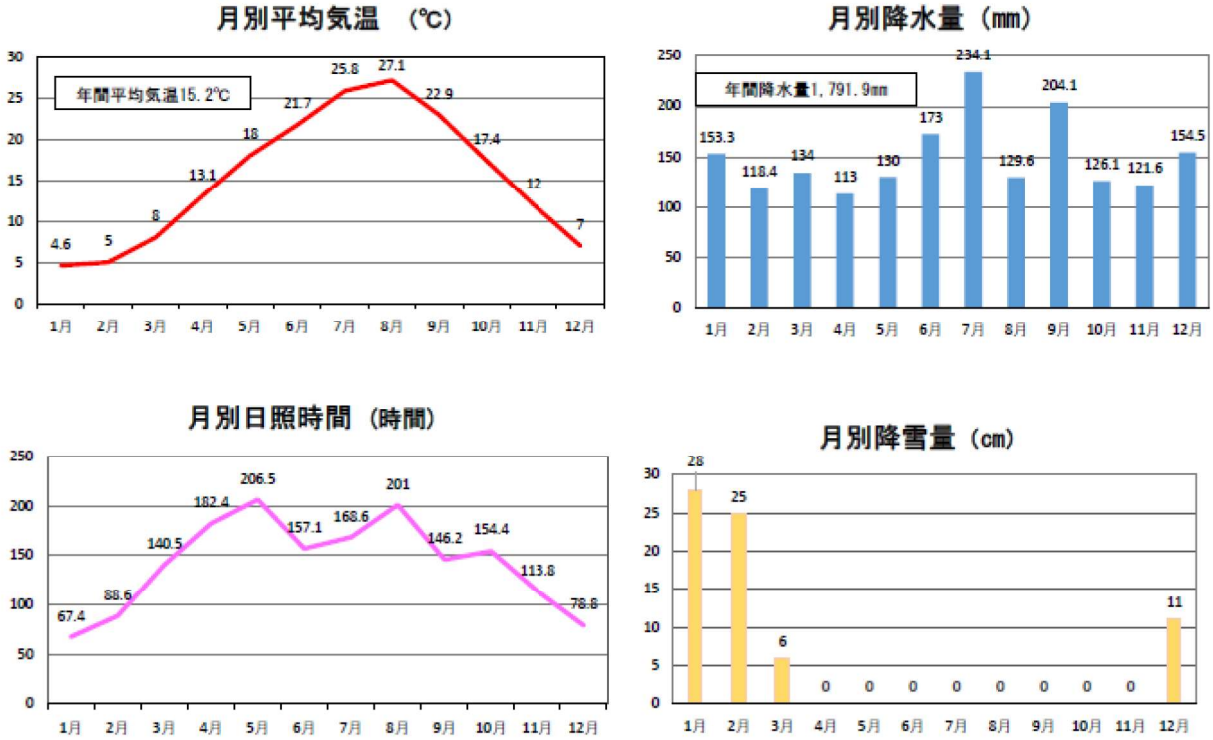
4～5 月の春の季節は降水量が少なく、温度も低く、穏やかな日和が多いです。しかし、年によっては、冬の名残をとどめて、4 月上旬に淡雪を見ることもあります。例年は 3 月下旬から 4 月上旬

からはサクラやツツジが開花します。

6～8 月の夏は、梅雨期と盛夏期に分かれます。梅雨は 6 月中旬からおよそ 1 か月続きます。梅雨明けとともに真夏となり、気温は年中で最も高いです。中国山地の上に湧き上る積乱雲は夏の風物詩で、宍道湖面に大きな影を落とします。

9～11 月の秋は、モミジが 11 月上旬頃から色づき、紅葉シーズンを迎えますが、冬の到来は早いです。10 月下旬には冬の使者カモ・ガン・コハクチョウなどが宍道湖や中海を中心に飛来します。12 月に入ると島根半島や中国山地の尾根は雪に覆われ始めます。

12～2 月の冬は、いわゆる西高東低の冬型気圧配置となり、日本はこの高気圧の支配下に入ります。ここから吹き出す冷たい季節風（この地方では主に西風）は、連日、日本海上から湿っぽい空気を運んで雪となります。曇天が続き日照時間が短くなります。3 月初旬になると気温が 10 度を超える日が見られるようになり、この頃になるとコハクチョウの北帰も始まります。



（資料：気象庁のデータを元に作成　H3（1991）～R2（2020）の 30 年間の平均値）

２．社会的状況

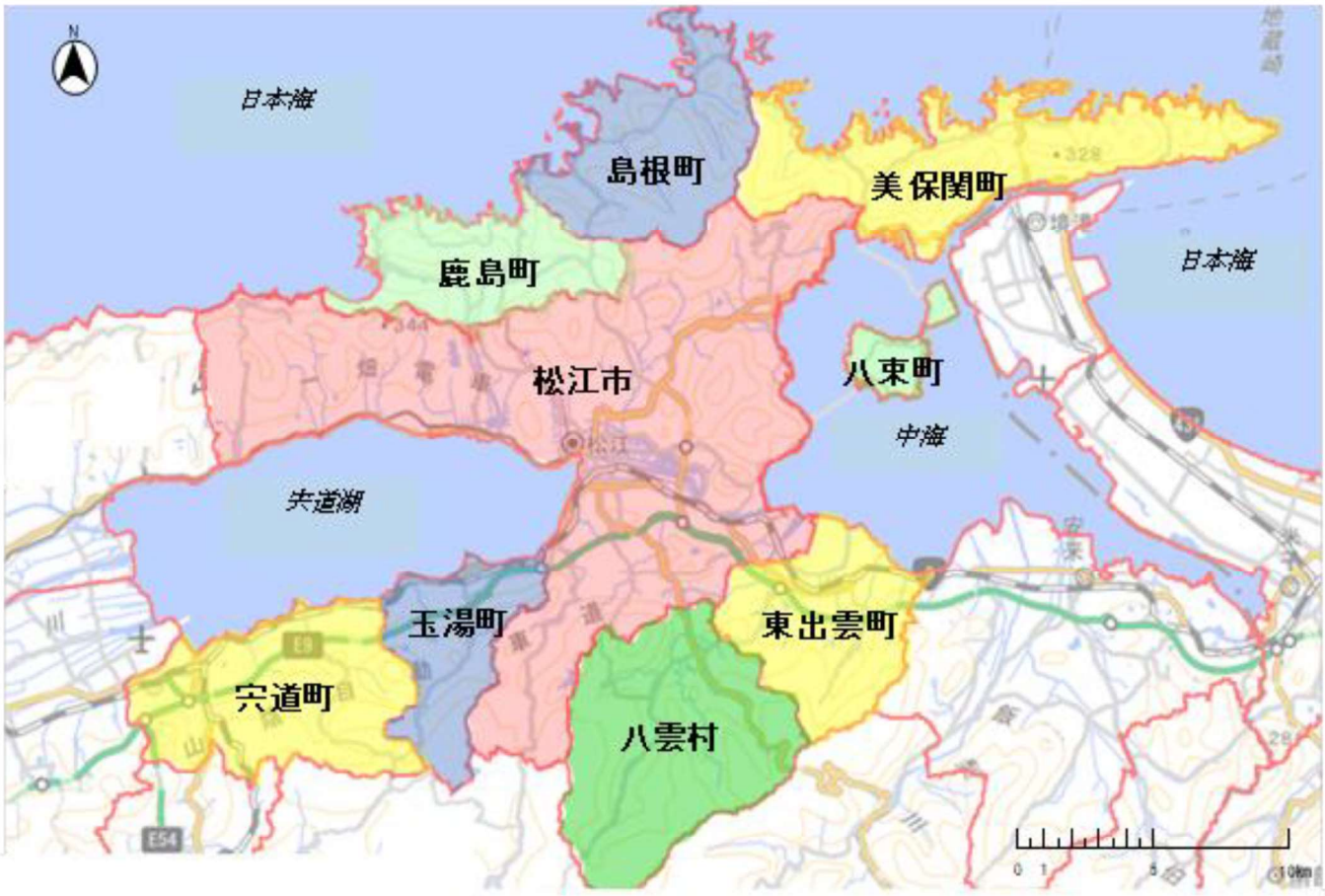
１）市の沿革

明治 4 年（1871）7 月の廃藩置県によって松江藩が廃止され、新たに松江県が置かれました。11 月には旧支藩の広瀬県・母里県に隠岐をあわせた島根県が成立、旧松江城三之丸南に最初の県庁が置かれました。明治 9 年（1876）、浜田県、鳥取県をあわせた山陰五州におよぶ島根県が誕生しましたが、その後、鳥取県が分離し、明治 14 年（1881）に現在の島根県域となりました。

明治 22 年（1889）4 月、松江市は全国の 30 市とともに市制を施行しました。明治 29 年（1896）、藩政時代の城下町を構成していた島根郡・意宇郡に秋鹿郡の三郡をあわせた八束郡が誕生しました。以降、八束郡内で町村の合併が進み、昭和 9 年（1934）から 35 年（1960）にかけて 9 回にわたり、周辺町村の松江市への編入合併が行われました。

21 世紀に入ると、「平成の大合併」といわれる市町村の広域合併が全国で行われ、松江市も、平成 17 年（2005）3 月 31 日に八束郡 7 町村と合併して新松江市となりました。さらに、平成 23 年（2011）8 月 1 日には東出雲町を編入し、かつての旧松江市と旧八束郡八町村すべてを抱合する、現在の松江市が誕生しました。平成 24 年（2012）4 月に特例市、平成 30 年（2018）4 月に中核市に移行しています。

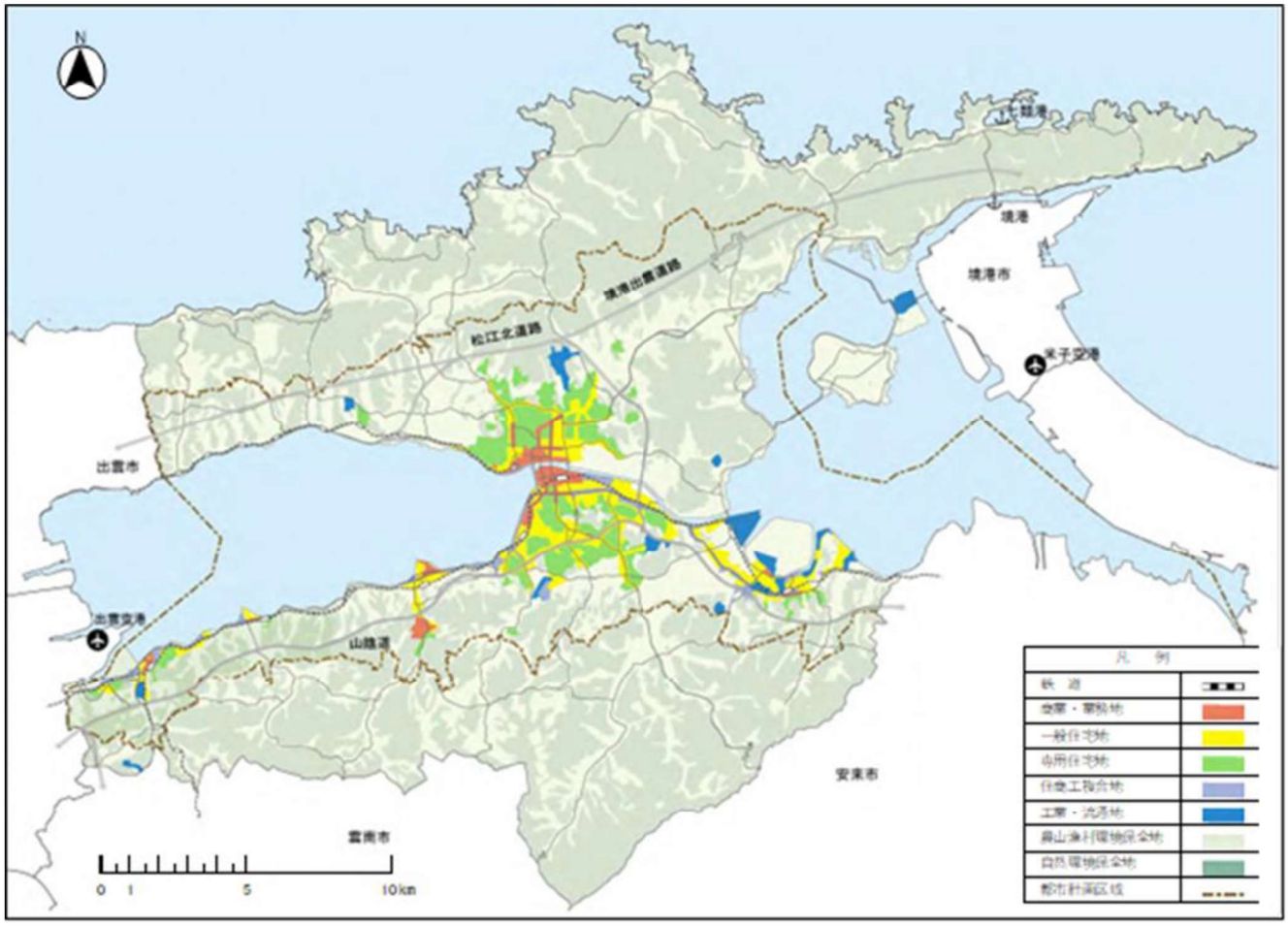
平成合併前の旧市町村図



※『松江市史』通史編 5「近現代」より

２）土地利用

地目別土地利用面積は、山林の占める割合が 43.04%で最も多く、続いて田畑の耕地が 11.34%、宅地 5.96%となっています。松江市都市マスタープランでは、用途地域の 35.3ｋ㎡に用途地域外の工業団体等 1.5ｋ㎡を加えた 36.8ｋ㎡に都市的な都市利用方針が定められ、それ以外には自然的な土地利用方針が定められています。その内訳は、住居系 4.5%、商業系 1.2%、工業系 0.7%、農村漁村環境保全地・自然環境保全地 93.6%となっています。



土地利用方針図

第４章で規定する４つの地域別にみると、

（１）日本海沿岸地域は、南側はほぼ山林となっていますが、古くから海運交通の要所・漁港として栄えた浦々には漁港と集落が点在し、その周辺に農地が分布しています。佐陀川や講武川沿いにはまとまった農地が分布しています。また、一部海岸部は大山隠岐国立公園に、大平山・枕木山周辺は宍道湖北山県立自然公園に指定されています。

（２）中海・宍道湖沿岸地域（北岸）では、松江城下として栄えた殿町を中心に官公庁・文化施設・病院など高次都市機能が集積し、マンション立地が多い地域もあります。また、くにびき道路や学園通り沿線、松江鹿島美保関線などの幹線道路の沿線では開発が進み、多数の商業施設が立地しています。一方、旧市街地の住宅地では、近年空き家・空き地・駐車場などの低未利用地が増加しています。中心市街地を外れた国道 431 号沿いには既存集落が点在し、その周辺や谷沿いには農地が広がっていますが、その他は山林となっています。また、嵩山・大平山・朝日山・枕木山周辺は、宍道湖北山県立自然公園に指定されています。

（３）中海・宍道湖沿岸地域（南岸）は、JR 松江駅周辺に金融機関の本店、企業の支店、宿泊施設、大規模商業施設等が立地しています。国道 9 号沿線や国道 432 号等の幹線道路沿いに店舗や事務所が集積しており、その周辺には住宅地が広がる一方、江戸時代の商人地として栄えた白潟地区や足軽居住地だった雑賀地区では旧市街地の住宅地同様に低未利用地が増加しています。東部には馬潟鉄工団地や内陸工業団地といった工業地が、南・西部には山林や農地が分布しています。八束は大半が農地となっており、農漁村集落が点在している他、江島には工業地が集積しています。

（４）中国山地北側地域の雲南市境は、豊かな自然に囲まれた集落がある地区ですが、公共交通の利便性が低く、人口減少・少子高齢化が進展しています。国道 432 号等の幹線道路沿いなどに小規模な集落が点在し、谷沿いに農地が広がっていますが、その他はほとんどが山林になっています。

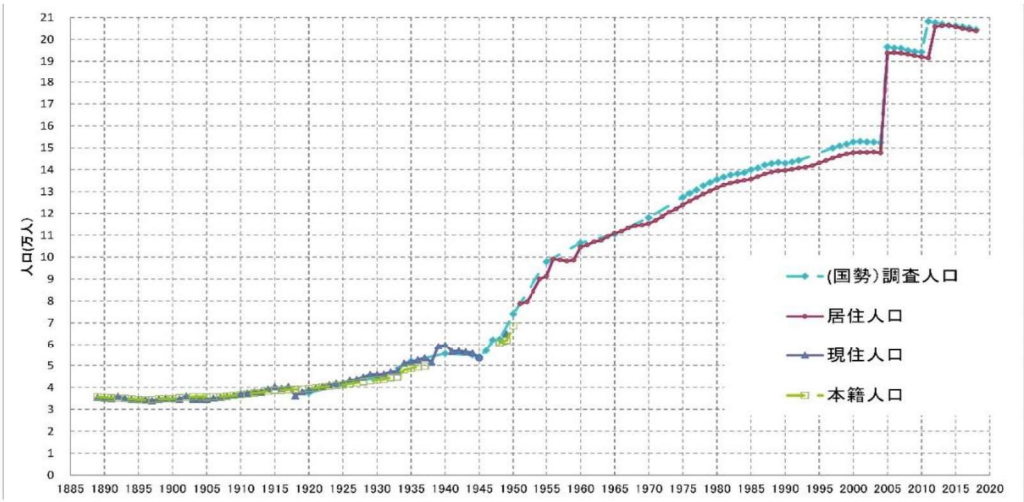
３）人口動態

市制施行の明治 22 年（1889）、松江市の現住人口は 35,804 人でした。その後次第に増加し、昭和 15 年（1940）の 59,771 人を頂点として、戦中・戦後は一時低下しますが、戦後は引き揚げやベビーブームなどにより昭和 31 年（1956）に 99,134 人まで急増、さらに合併による市域の拡大もあって人口は順調に増大していきました。

その後、平成 12 年（2000）をピークとして減少に転じ、平成 17 年（2005）の八束郡 7 町村との合併、平成 23 年（2011）の東出雲町の編入を経て、平成 26 年（2014）に過去最大の 206,404 人となりました。すなわち、松江市の人口は市政施行時から現在までに約 5.8 倍になりましたが、一方で、面積は 4.78 平方キロメートルから 572.99 平方キロメートルへと約 120 倍になっています。このことは、現在の松江市域が都市部だけでなく、人口密度の低い農村地域を多く合併・編入して成立していることを示しています。

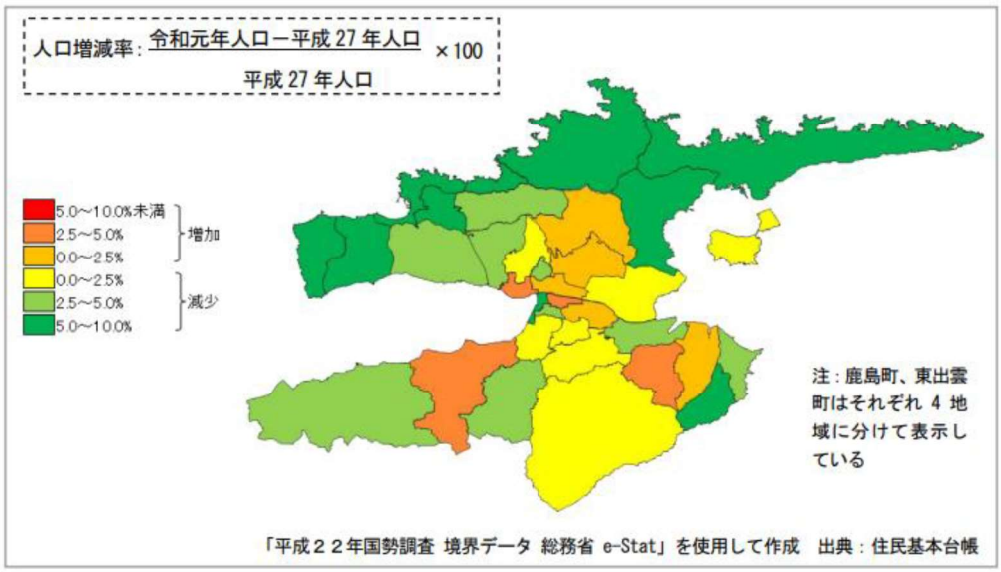
令和 2 年(2020)の国勢調査によれば、松江市の人口は 203,616 人で、前回調査の平成 27 年(2015) 206,230 人と比べて 2,614 人（1.3%）減少しています。平成 28 年（2016）以後、県外転出超過の減少による社会増の傾向も見られますが、自然減を相殺するほどではなく、緩やかな減少傾向にあります。年齢別割合でみると、年少人口（15 歳未満）の減少、高齢者人口（65 歳以上）の増加傾向も見られます。

「松江市総合計画」別冊において、国立社会保障・人口問題研究所（以下、社人研）が 2010 年の国勢調査から 2015 年の国勢調査の傾向 をもとに推計した松江市の将来推計では、2060 年の本市の人口は、154,702 人（2015 年比減少率約 25%） となりました。合計特殊出生率は 1.60～1.62 程度で推移し、出生数は 2060 年時点で年間約 1,090 人 となり、総人口、出生数ともに 2100 年代に入っても減少し続ける推計となっています。



注：調査人口は国勢調査ほかの人口調査と1976年以後これに基づく推計人口。居住人口は住民登録（基本台帳）による人口。
本籍人口は戸籍に記載された人口，現住人口＝本籍人口+入寄留人口-出寄留人口

松江市の人口



地域別人口の増減マップ

４）交通機関

近代に入り、広域的な移動の自由が認められると、様々な交通網の整備が始まりました。松江市域においては、鉄道の敷設は遅く、明治 41 年（1908）まで待たなければなりませんでしたが、それ以前の陸上交通を担うために道路網が整備され、また大型・大量輸送を支える海上交通も盛んでした。

①道路

明治以降、荷車・馬車・人力車などの登場を機に、道幅が広がり、勾配を緩やかにする必要が出てきました。松江を起点に宍道・三刀屋・赤名などを経て尾道に至る「尾道街道」、浜田から広島に達する「広島街道」、これに「山陰道」を含めた三大道路改修事業が明治 24 年（1891）に完成し、近代における陸上交通発達の足掛かりとなりました。

現在では、中海・宍道湖・大橋川の南側を国道 9 号が東西に走り、松江市から雲南市方面につながる島根県道 24 号線（松江木次線）、仁多郡奥出雲町方面につながる島根県道 25 号線（玉湯吾妻山線）、山陽・四国方面につながる国道 54 号と交わっています。美保関町境水道大橋から市内中心部を通って宍道湖北岸に国道 431 号が、国道 9 号相生町から南へ国道 432 号が走っています。平成 25 年 3 月に松江だんだん道路が全線開通し、縁結び大橋を加えた 6 つの大橋により、大橋川により隔てられた市の南北が結ばれています。高速道路関係では、平成 4 年（1992）12 月に米子自動車道全線開通、平成 27 年（2015）3 月に尾道松江線全線開通となりました。

②海路

藩政時代に商品経済の発展を支える主要な交通・流通網として機能してきた水運は、引き続き明治以降も鉄道敷設までは物資の大量かつ遠距離輸送のために用いられました。山陰と大阪をつなぐ連絡船「阪鶴丸」や、宍道湖や中海を渡る湖上交通「合同汽船」などが活躍しました。現在は、松江市七類港と鳥取県境港市境港から隠岐諸島へ隠岐汽船が高速船、フェリーを運航しています。

③鉄道

明治 41 年（1908）11 月、松江に鉄道が開通すると、いよいよ鉄道輸送時代を迎えます。宍道―木次間をつなぐ簸上鉄道（後に国鉄に引き継がれる）、出雲市今市から一畑寺への参詣客を運ぶ一畑電気鉄道なども次々と発足し、鉄道網が拡張していきました。昭和 25 年（1950）からは、陰陽連絡鉄道として山陰と広島を直通でつなぐ急行「ちどり」が活躍するなど、東、西、南方面へ鉄道路線が通じていましたが、その後の道路整備の進展による自家用車・高速バスの隆盛、さらには山陽新幹線の開通などを機に、伯備線を経由した関西、首都圏方面の路線が主体となっています。

現在は、ＪＲ西日本山陰本線が中海・大橋川・宍道湖の南側を東西に走り、ＪＲ西日本木次線が市域西部から南向きに走っています。一畑電車は、松江しんじ湖温泉―電鉄出雲市―出雲大社間まで延び、宍道湖北岸を東西に通っています。

④航空

出雲縁結び空港は、松江市内から約 20 kmの距離にあり、島根県の空の玄関口として昭和 41 年（1966）に開港（当時は出雲空港）しました。当初は大阪線・隠岐線それぞれ 1 日 1 往復で始まりましたが、昭和 54 年（1979）には東京線が開設されました。また、鳥取県の米子鬼太郎空港も同じく松江市内から約 20 kmの距離にあります。昭和 13 年に「米子飛行場」として開港し、昭和 39 年に全日空（ANA）による東京―米子線が開設しました。

現在の就航便は次のとおりです。

ア）出雲縁結び空港

松江市内からバス 30 分

主要路線：ＪＡＬ（東京・大阪）

ＪＡＣ（福岡・隠岐）、ＦＤＡ（名古屋小牧・名古屋中部・静岡）

イ）米子鬼太郎空港

松江市内からバス 45 分

主要路線：ＡＮＡ（東京）

エアソウル、グレーターベイ航空

⑤バス路線

ＪＲ松江駅バスターミナルを中心に市街地および近郊地域においては路線バスが、郊外地域においてはコミュニティバスが運行され、これらの組み合わせにより、居住地域は概ね公共交通網によりカバーされています。路線網は、松江駅を中心に南北の市街地内をそれぞれ循環する路線（市営バス）、市街地中心部と近郊地域、あるいは市街地中心部を挟んで近郊地域同士を結ぶ路線（市営バス、一部一畑バス）、そして、市街地中心部と郊外の生活拠点を結ぶ路線（一畑バス、一部市営バス）により構成されています。

その他、県外へ向かう高速バスは、ＪＲ松江駅から山陽（広島・岡山）方面、京阪神（大阪・京都・神戸）方面、名古屋、東京、福岡へとつながる各路線があります。

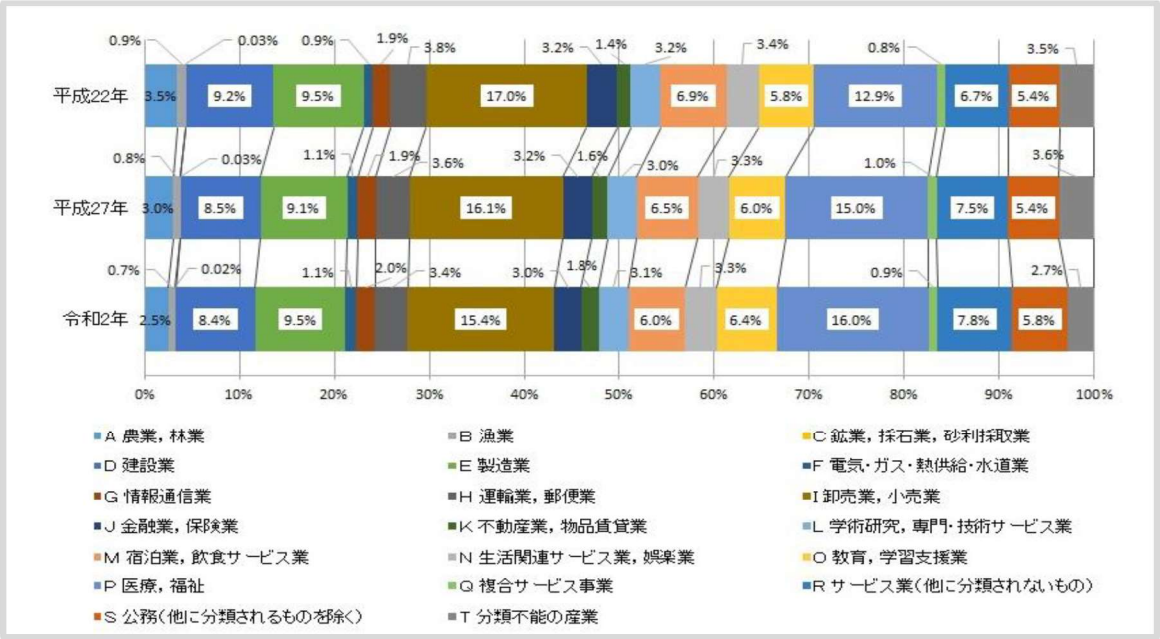
各交通機関　位置図

5）産業

①産業別にみた人口構成等

令和２年（2020）の国勢調査によると、15 歳以上就業者の産業別構成割合は、総数 97,465 人

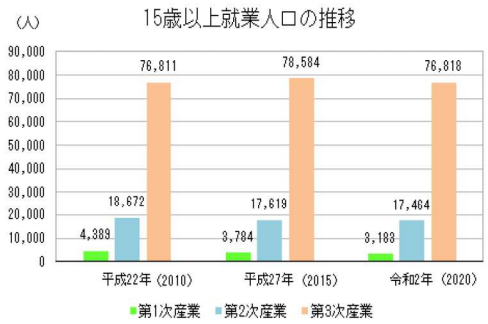
のうち、農林漁業の第１次産業就業者が 3.2%、製造業や建設業などの第２次産業就業者が 18%、商業・自由業・サービス業などの第３次産業就業者が 78.8%で、第３次産業の占める割合が最も高くなっています。



15歳以上就業人口　産業別構成

	計		第1次産業		第2次産業		第3次産業	
平成22年	99,872人	100.0%	4,389人	4.4%	18,672人	18.7%	76,811人	76.9%
平成27年	99,987人	100.0%	3,784人	3.8%	17,619人	17.6%	78,584人	78.6%
令和2年	97,465人	100.0%	3,183人	3.2%	17,464人	18.0%	76,818人	78.8%

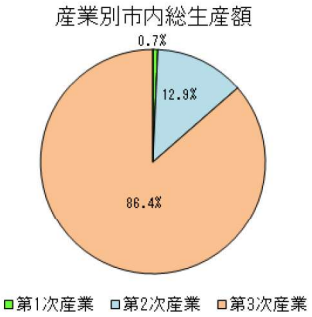
（資料：国勢調査を元に作成）



令和元年度（2019）産業別市内総生産額　（単位：百万円）

合計		第1次産業		第2次産業		第3次産業	
803,264	100.0%	5,598	0.7%	103,593	12.9%	694,073	86.4%

（資料：令和元年度島根県市町村民経済計算）



②農業

農業従事者数は、平成 27 年（2015）農林業センサスの 5,769 人に対して令和 2 年（2022）には 3,830 人に減少し、経営耕作地面積は、平成 27 年（2015）の 2,828ha に対して令和 2 年（2022）には 2,658ha と、減少しています。宍道湖・中海周辺に広がる水田では法人化による大規模な経営を行う農業者や集落営農組織などを中心に米のほか蕎麦・麦・大豆が生産され、畑作では揖屋干拓地を中心としたキャベツ、八束町での牡丹、東出雲町などでの西条柿の栽培が盛んです。

伝統のある地域産品として、上記のほか、津田かぶ・秋鹿牛蒡・黒田せり・薬用人参が生産されています。平成 11 年（1999）に「道の駅秋鹿なぎさ公園」が、平成 18 年（2006）には「道の駅本庄」が開設され、農業者が消費者へ農産物の直接販売や加工品づくりの取組拠点になりました。旧市内・八束町・東出雲町などでは地元企業の農業参入もありますが、農業就業者の中心は 70 代となっており、担い手不足が課題です。

③漁業

松江市域の漁業は、海面漁業（海に面した地域での漁業）と、中海・宍道湖の内水面漁業（湖での漁業）に分けられます。漁業も農業と同様に高齢化が進み、漁業協同組合（ＪＦしまね、中海漁業協同組合、宍道湖漁業協同組合）の組合員数は、松江市農林水産業振興計画（平成 31 年 3 月）によると、平成 25 年（2013）の 1,420 人に対して平成 29 年（2017）には 1,212 人に減少しています。

日本海沿岸では、ベニズワイガニ・ブリ・サワラ類・マアジ・イワシを中心に漁獲があり、主に定置網漁業が行われ、ワカメ・イワガキ・アワビの海面試験養殖が行われています。中海では干拓・淡水化事業の影響を受け、漁獲量が大きく減少しましたが、現在はスズキ類・ボラを中心に刺し網漁業が行われ、サルボウガイやアサリの試験養殖が生産量を伸ばしています。宍道湖では、松江の中心的な漁獲物であるヤマトシジミが漁獲量の 99%を占めています。

④商業

近年、旧市街地の中心商店街の店舗数は減少していますが、郊外の新興の商業地域は活況を呈し、旧商店街の空洞化をカバーしています。令和 3 年（2021）経済センサス活動調査では、市内に 29 か所の商業集積地（商店街）があり、事業所数は 1,937 で、従業員数は 16,526 人、年間商品販売額は 648,010 百万円となっています。平成 28 年(2016)と比べると、事業所数、従業員数及び年間商品販売額は減少しています。

⑤工業

空港や高速道路に近く、(株)プロテリアル（旧日立金属(株)安来工場）などの鉄鋼関連企業と取り引きしやすい八束町や東出雲町などでは、製造業・金属加工業などが立地しています。平成 16 年（2004）には八束町と境港市を結ぶ江島大橋が完成し、物流ネットワーク形成の基盤になりました。令和元年（2019）工業統計調査では、令和 3 年(2021)経済センサス活動調査では、事業所数は 222 で、従業者数は 6,457 人、製造品出荷額等は 1,263 億円となっています。平成 28 年(2016)と比べると、事業所数は減少し、従業者数及び製造品出荷額等は増加しています。製造品

出荷額等で上位にあるのは、生産用機械器具製造業、木材・木製品製造業（家具を除く）、食料品製造業です。

平成 12 年（2000）の「ＩＴ基本法」成立後、ソフトビジネスパークにコールセンター業の会社が進出しました。また、旧松江市から玉湯町にかけての湖南周辺で、ソフトウェア関連などの非製造業の事業所が新設されました。情報通信業は、旧松江市と東出雲町・宍道町・鹿島町などに立地していますが、小規模の事業所が多いです。

６）観光

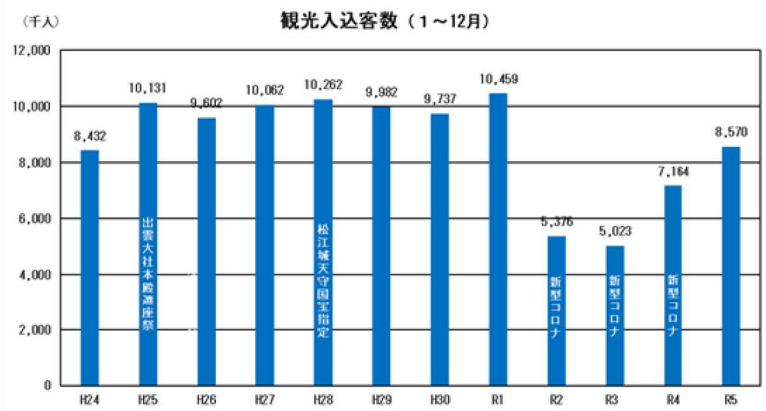
昭和 26 年（1951）3 月、「ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の文筆を通じて世界的に著名である」として、「松江国際文化観光都市建設法」が公布され、松江は京都・奈良に続いて国際文化観光都市となりました。その後、現在に至るまで市内には自然、歴史、文化を生かした観光施設が充実し、年間観光入込客数は、平成 25 年(2013)の出雲大社本殿遷座祭と平成 27 年（2015）の松江城天守国宝指定を契機に増加し、年間 1,000 万人前後で堅調に推移しています。「国宝松江城天守」や「茶の湯」などの歴史文化的な魅力と「大山・隠岐国立公園」や「島根半島・宍道湖中海ジオパーク」のエリアにみられる自然景観など、多彩な資源を生かした観光商品作りや受け入れ環境整備を行っています。また、市内をめぐる観光交通手段の利便性も重要な要素であり、次のようなものがあります。

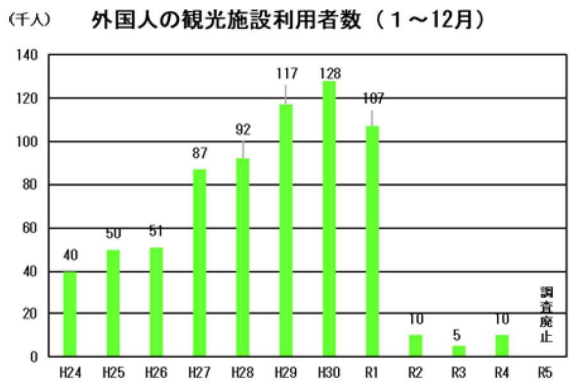
ア）観光ループバス（ぐるっと松江レイクライン）：市内の主要観光施設を結ぶ観光ループバスを 30 分間隔で運行しています。

イ）観光タクシー：市内各社により実施し、希望にあわせた時間単位の市内コース及び近郊コースがあります。

ウ）レンタカー：ＪＲ松江駅周辺に 6 社（8 営業所）があります。

一方、令和 2 年（2020）からのコロナ禍により観光客の入込は大幅に減少しました。令和 5 年に感染法上の位置づけが 5 類に移行されてからは回復基調にあるものの、コロナ禍前の水準とまではいかない状況であり、さらに入込客数の回復を目指していく必要があります。また、今後は、域外からの観光客誘致のみではなく、域内での観光需要の掘り起こしのために、マイクロツーリズムなど地域住民に文化財を始めとする地域の魅力を発信する取組も進めていきます。



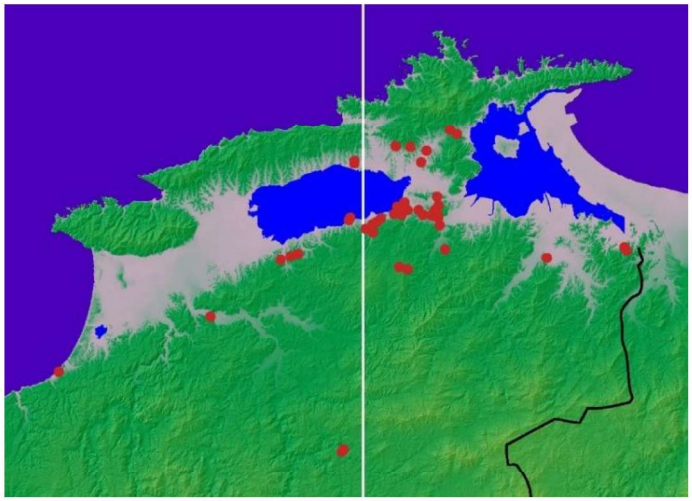


３．歴史的背景

１）旧石器時代～縄文時代

松江市がある日本海に面する地域は、ユーラシア大陸に沿って日本海を南下する寒流のリマン海流と、日本海を北上する暖流の対馬海流がぶつかり合う地域です。こうした地理的環境のなかで約3万8千年前にホモサピエンスが活動し始めたころから日本海を通じて活発な文化の交流がありました。

後期旧石器時代（およそ38,000年前～16,000年前）には松江周辺は隠岐の黒曜石や花仙山周辺の玉髄が石器の材料として広く利用されたため、人々の交通が多かったと考えられます。また寒冷な気候の中、日本海は内海になっていましたが、日本海沿岸交流は盛んでした。沿岸部での人の行き来は、上立遺跡（大草町）から東北地方の石材と技術で製作された旧石器が発見されていることや、玉湯町の花仙山周辺から東北地方の技術（湧別技法）を用いた石器づくりが行われていたことから、今から1万8千年以上前に遡るとされています。



松江周辺の旧石器時代の遺跡

縄文時代になると、温暖化による海進で島根半島が独立した島となり、やがて出雲市の浜山や鳥取県の弓ヶ浜の一部が形成されて、現在の景観の基礎ができます。縄文時代も活発な人々の交流を知ることができます。島根大学構内遺跡からは、縄文時代前期（約7，000年前）の九州に影響を受けた土器や丸木舟、櫂が出土していて、海流に乗って情報の伝達があったことが知られています。鹿島町では佐太講武貝塚（史跡）の大量のヤマトシジミの貝層から獣骨や土器、石器などが見つかり、また美保関町の中海に面した断崖では、海食洞窟を利用した住居跡（史跡権現山洞窟住居跡、史跡サルガ鼻洞窟住居跡）が知られていて、自然環境に柔軟に対応した縄文人の姿が窺われます。

サルガ鼻洞穴遺跡

２）弥生時代

弥生時代（紀元前8世紀頃）になると、大陸から九州経由で水田稲作が伝わり、夫敷遺跡（竹矢町）からは水田跡が発見されているほか、西川津遺跡からは鍬や鋤、石包丁などの農耕具も発見されています。

新しい文化は文明の入り口だった北部九州から伝播しており、山陰は日本海ルートを通じて早い段階から弥生文化を受け入れた地域です。松江では、日本海に面した古浦から講武平野にかけて稲作が定着し、西川津遺跡では規模の大きな環濠集落ができました。古浦砂丘遺跡や堀部第1遺跡で

は弥生時代前期の人骨も埋葬されていました。やがて、大橋川南部地域にも拠点集落の布田遺跡などがうまれます。それに連動するように宍道湖南岸に環壕を持つ田和山遺跡や神後田遺跡のようなランドマークとなる遺跡が出現します。

田和山遺跡と宍道湖

このほか、紀元前４世紀頃には朝鮮半島からは青銅器や鉄器も伝わっています。青銅器は初め武器として九州地方に伝わりました。竹矢町出土とされる細形銅剣は、武器として朝鮮半島で製作されたものと考えられています。その後、弥生時代中期には銅剣などの青銅器は祭祀具として発展しました。松江市でも鹿島町の志谷奥遺跡から６本の銅剣と３個の銅鐸が発見されていて、弥生時代の精神文化を知る手掛かりとなっています。鉄は武器のほか、木製品の加工や農工具にも用いられ、鉄製品の普及は弥生時代の生産力の向上に大きく寄与しました。

また弥生時代は、権力者が現われた時代でもあります。弥生時代中期になると、「クニ」とも呼ばれる政治的結合単位の首長は、権力の象徴として墳丘墓を築きはじめます。そして後期(1 世紀頃)になると山陰地方に特有な墳丘墓の形態として四隅突出墓が定着しました。

３）古墳時代～平安時代中期(古代)

３世紀頃になると、地域ごとの墳丘墓の特色を統合する動きが始まり、３世紀後半頃には、近畿地方に生まれたヤマト政権が地域の連合体の中心となって前方後円墳が築かれる時代になります。共通の大型の墳墓を連合のモニュメントとして、広範囲に古墳を築く時代の訪れです。

八日山古墳出土三角縁神獣鏡

出雲では、弥生時代の地域的特色を受け継いで方墳を造り続けますが、竪穴式石槨を埋葬主体にしたり中国の鏡を副葬するなど、総合的には古墳の主要な要素を受け入れ、広範囲の地域連合の一つになったと考えられます。茶臼山の北側にある矢田町の廻田１号墳は、出雲東部で最古段階(4 世紀後半)の前方後円墳とされています。これ以降古代を通して、松江周辺は出雲地方東部の中心地となり、6 世紀後半には出雲地方の中心地になるのです。

古墳時代中期（5 世紀頃)には、宍道湖沿岸や大橋川沿岸に拠点的に大規模古墳が築かれるようになります。大垣大塚古墳群、丹花庵古墳、古曽志大谷１号墳、竹矢岩船古墳、史跡石屋古墳などがそれで、小地域単位ごとに有力な豪族が存在していたことが推定されています。

丹花庵古墳石棺

古墳時代後期になると、出雲東部（松江市茶臼山周辺）と西部（出雲市神戸川下流域）で権力が集中する様子が見られます。そのうち東部では山代町・大庭町を中心とした地域に大型古墳が集中します。具体的には島根県下最大規模の山代二子塚（前方後方墳：全長 94 m）、山代方墳（方墳：45×43m）、大規模な石室で知られる山代原古墳が山代・大庭地区に累代的に築かれます。その間に出雲西部に対する東部の影響力が大きくなり、山代・大庭の勢力が後の出雲国の範囲を掌握することとなります。

松江出土の玉（釜代１号墳、石田１号墳）

また、古墳時代には玉作りも盛んでした。出雲地方の玉作りは、弥生時代前期から行われていたことが松江市の西川津遺跡からの出土品によって知られていますが、弥生時代後期（1 世紀頃）以降、玉湯町の花仙山で採れる良質な碧玉（青メノウ）・瑪瑙（赤めのう）を使った玉作りがはじまり、5 世紀以降には花仙山周辺の地域で集中的に行われるようになります。その工房跡は出雲玉作跡として国指定の史跡となっていますが、ここで作られた勾玉や管玉は日本各地に運ばれたことが知られています。

出雲部最大の古墳　山代二子塚古墳

7 世紀後半になると、大和を中心に日本という国家が形作られ、地方の行政区分として国（現在の県に近い単位です）が置かれました。701 年には大宝律令が成立し、法と仕組みによる国家の体制が整いました。出雲国内はさらに 9 つの郡に分かれ、松江市は島根郡、秋鹿郡、意宇郡（のちの能義郡を除く）があたり、その枠組みは近代・戦後まで引き継がれました。出雲国の中心である国府が置かれたのは、古墳時代後期に出雲全体を掌握した出雲臣の本貫地である意宇川下流域の意宇平野です。律令制の下では国庁を中心として意宇平野には条里制の区画がなされ、東西南北の官道も整備されました。また郡家、軍団、駅、国司館などの施設も置かれました。天平 5 年（733）に編集された『出雲国風土記』には、郡、郷（国の下の行政区分）の名前やその由来、郡家（郡の役所）からの路程、寺院、社、自然や産物に至るまで詳細に当時の出雲の様子が記されています。また、唯一完本で写本が残っていることから、古代の実態を知る貴重な資料となっています。松江市南郊には国府のほか、豪族の氏寺（山代郷北新造院、南新造院）、山代郷正倉、黒田駅、意宇軍団などが置かれ、その遺跡も少なからず残っています。古代山陰道（正西道）や隠岐に通じる枉北道、中国山地につながる正南道などの

『出雲国風土記』写本

出雲国府跡

痕跡も明らかになりつつあります。神社は不確定なものも含めて 140 も記載され、中世以降も大きな力を保つ熊野大社、佐太神社、美保神社など多くの古社が残ります。8 世紀半ばには国分寺、国分尼寺（こくぶにじ）などの官立寺院も置かれ、政治、経済、文化の中心地となりました。また産業も大井町に集約的な須恵器窯跡が残され、玉作りも出雲国府や出雲玉作跡付近で 8 世紀以降も行われていました。

出雲国分寺跡

律令国家日本と地方行政単位である出雲国は、経済的な基盤として税を徴収し、公共事業や勧農政策を行いました。税は戸籍を作って戸と人当たりに決まったものを納めさせたり、公への労働を義務付けました。米による税収を確実に把握するため、水田は条里制と呼ばれる 108m 四方の区切りが設けられました。条里の跡は数十年前までは松江の各所に残っていましたが、現在は出雲国府の北西側に史跡として残されています。朝酌促戸（あさくみのせと）や玉作街（たまちまた）には市が立ち、多くの人々が集まってにぎやかだった様子も風土記に描かれ、現在もその光景を思い浮かべることができます。

山代郷北新造院跡

一方、都が京都に移される頃（8 世紀終わり～9 世紀）になると、公地公民と呼ばれる、土地と民衆を直轄的におおやけが支配する仕組みが崩れ始め、荘園と呼ばれる土地の私有も広がっていきます。重い税から逃れるために浮浪人と呼ばれる戸籍に記されない人々が増加することもあって、地域社会の仕組みが動揺しはじめます。動乱や災害も頻発し、やがて平安時代中頃になると、中央では政治の実権は藤原摂関家に移ります。やがて天皇が退位後、上皇・法皇として実質的な権力を握ることと連動して地域社会も大きく変化し、次第に律令国家は衰退していきます。

４）平安時代後期～安土桃山時代（中世）

中世には、公家や寺社、武家の私的な領有地である荘園や、国司（受領）の支配下にある国衙領が広がりました。

古代に国府が置かれた意宇平野は、鎌倉期においても引き続き出雲国の中心であり、山代郷から大草郷、竹矢郷、出雲郷に及ぶ一体は出雲府中と呼ばれました。府中には国内の治安維持の任務をおびた守護所や国内神社の統括を行う総社が置かれました。

承久 3 年（1221）の承久の乱後に、守護に任命された佐々木氏は出雲府中に入った後、守護所を神門郡塩冶郷（出雲市）に移しました。その後、守護所は佐々木氏（塩冶氏）の没落と共に再び出雲府中に戻され、更に安来市広瀬町の富田城がある富田荘に移されたと推測されています。このため、出雲府中は次第に政治の中心から遠ざかっていきます。しかし総社や神魂神社など「意宇六社」の祭祀は国造家によって続けられました。

松江周辺の荘園の分布

室町幕府の下で守護となった京極氏の下では、尼子氏が守護代として支配権を広げました。特に、15 世紀半ば以降、美保関を掌握した後は、関銭を徴収して経済力を伸ばし、京極氏に代って戦国大名へと成長し、山陰・山陽の 11 カ国に勢力を伸ばすまでになりました。しかし、16 世紀半ばになると逆に毛利氏の攻撃を受けるようになり、永禄 9 年（1566）には尼子義久は富田城を開城し、出雲国は毛利氏が支配することとなりました。

美保神社（奥：本殿、手前：拝殿）

また、中世以降は各荘園や公領から年貢などの物資を、都に住む領主へ運送するための海上交通が発達した時代でもありました。こうした社会情勢のなかで美保郷に海関が設けられ、出雲国守護の直轄下に置かれ、港として発達する基盤となりました。現在の中海と宍道湖は、物資の流通や交通の動脈となり、現在の中海から大橋川に入る起点となる馬潟には関がおかれ、砂州上に発達した末次と白潟の湊町の間には橋がかけられました。松江は水陸の交通の要衝として、経済的にも出雲の中心地としての位置を維持していきました。

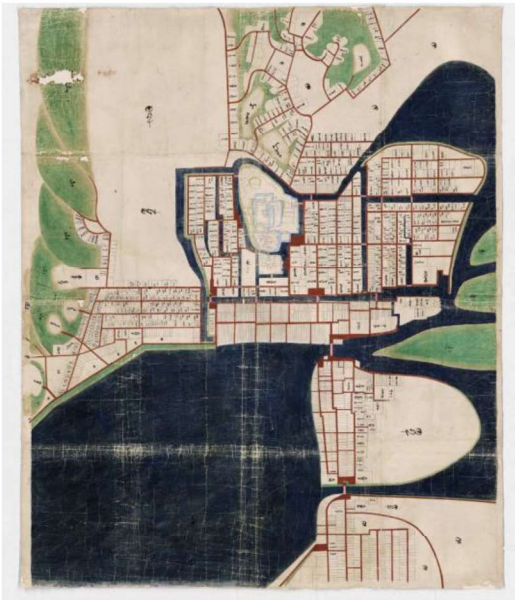
中世の松江市北部方面周辺推定図

５）江戸時代（近世）

関ヶ原の合戦の後、徳川軍勝利に軍功のあった堀尾忠氏は、出雲・隠岐を与えられて父吉晴とともに富田城に入りました。しかし、富田が地形的に近世城下町を造るにふさわしい場所でなかったことから、松江に移城することとしました。城地の選定にあたっては、堀尾吉晴、忠氏親子は乃木村元山に上り、床几に腰かけて議論したといいます（親子が床几に腰かけたことにちなんで、元山は後に床几山と呼ばれます）。城地の選定をめぐっては父子で意見は分かれましたが、その後忠氏が急死したこともあって、吉晴は城地を忠氏が提案した亀田山に定め、孫の幼い忠晴を助けて慶長 12 年（1607）より城普請と城下町形成に着手、慶長 16 年（1611）に完成させました。

城下町の境に築かれた土手

それまで白潟、末次と呼ばれた砂州上に形成された湊町を核としながらも、周辺には湿地帯しかなかった場所に築かれた城郭と城下町は、町全体が防御と都市機能に重点を置いて新しく“都市計画”されたものでした。すなわち、丘陵を削り、湿地帯を埋めて殿町、母衣町、中原町などを造って侍町とし、堀割りで区画しました。その周辺に町家を置き、城下町の縁辺部に寺社を配置しました。道路にも防御の工夫を行い、鉤型路や袋小路、勢溜りなどを設けました。内堀や外堀には 40 余りの橋も架けられました。当時の様子は「堀尾期松江城下町絵図」（元和 6 年（1620）～寛永 10 年（1633））にも見られ、その都市構造は、現在まで引き継がれていることが確認できます。近年の発掘調査の成果によれば、城下町は洪水等で数度にわたり嵩上げされ、その結果、地下の近世遺跡が良好な形で残っていることも判明しています。



堀尾期松江城下町絵図
（島根大学附属図書館蔵）

寛永 10 年（1633）、松江藩主堀尾忠晴に跡継ぎがなく、堀尾氏は断絶し、代わって若狭国小浜城主であった京極忠高が入府しました。京極氏はわずか 1 代 3 年

ほどの短い治世でしたが、治水工事などに功績があり、斐伊川の若狭土手（出雲市武志町）を築いたことで有名です。

京極氏の後は、徳川家康の子、結城秀康の三男である松平直政が寛永 15 年（1638）、信濃国松本から入り、以後、明治維新まで徳川家の親藩として 10 代、230 年にわたって出雲国を治めました。代々の藩主の廟所は外中原町の月照寺境内にあり、松江藩主松平家墓所として平成 8 年（1996）に国史跡に指定されています。

京極高次の供養塔

松平家が藩主になった後、大雨や干ばつによる災害が続き、参勤交代や幕府の命令による工事費の負担などの借金により、藩財政は悪化をたどっていました。松江藩松平家 6 代藩主宗衍は、小田切備中を登用し、商業に力を注ぐ「延享の改革」と呼ばれる藩政改革に取組みますが、成功せず、17 歳になった息子の治郷に藩主の座を譲ります。7 代藩主となった治郷（隠居後の号：不昧）の下、家老朝日丹波を中心に、借金整理、公費節約、木綿等の産業振興、人員整理と抜擢など、「御立派の改革」と呼ばれる藩政改革が行われ、やがて藩財政は好転していきました。その後も藩政改革の精神は継続され、人口も増加し、幕末になると松江藩は豊かな藩として知られるようになっていきます。また、不昧が好んだ茶の湯は松江の文化を大きく成長させ、今でも人々の暮らしのなかに密着しています。

上空から見た松江城

６）明治時代～戦前（近代）

幕末に欧米列強によって開国・開港が強いられたことにより、日本は世界資本主義の中に組み入れられるようになりました。このため、明治時代になると中央集権化が急がれ、資本の蓄積と自由な労働力の確保、商品経済の発展と全国市場の拡大が必要となり、土地を始めとした私有財産権の確認、身分制の撤廃と居住・移転の自由、教育制度の整備、銀行と交通制度の整備、行政制度の変更等が急速に進められるようになりました。

急速な近代化が進む中で、自由民権運動にみられるような自由・人権思想も広がり、大日本帝国憲法制定後も政府と人々のせめぎあいが続きました。また、地域格差も生じ、日本海側は「裏日本」とも呼ばれるようになりました。

松江市域においては、明治維新後、明治 4 年（1871）7 月 14 日の廃藩置県によって松江藩が廃止されて松江県となり、同年 11 月には広瀬県、母里県と統合されて出雲部を管轄する島根県が成立しました。その後浜田県・鳥取県を合わせた範囲の島根県が誕生するなどしましたが、鳥取県が分離し、明治 14 年（1881）に現在の島根県域となりました。明治 22 年（1889）4 月 1 日の「市及町村制」の施行と、これに合わせて行われた町村合併により、松江市と八束郡の前身である島根郡・秋鹿郡・意宇郡の各町村が成立しました。

明治 23 年（1890）8 月、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が島根県尋常中学校と島根県師範学校の英語教師として松江に赴任しました。ハーンは、松江の美しい風景や風情をこよなく愛し、滞在した 1 年 3 か月の間に見聞した近世城下町の面影を残す松江の風情や島根半島の美しい自然などを『知られぬ日本の面影（日本瞥見記）』に著し、広く世界に紹介しました。ハーンが住まいした武家屋敷は、史跡小泉八雲旧居として当時のまま保存されています。また、ハーンの功績は、昭和 26 年（1951）に松江市が国際文化観光都市になった契機にもなっています。

明治に建てられた島根県庁

明治時代中頃までは、日本海の海運が流通の中心で、北前船などが美保関などの港に入港し、多くの物資や人の行き来がありました。鉄生産も西洋式溶鉱炉が中心となるまでは島根県が全国有数の生産量を誇り、その恩恵を松江も受けていました。やがて鉄道網が全国に広がるにつれて、物資の運送は陸路に主役を譲るとともに、首都圏や関西圏から物理的距離の離れた山陰地方には地域的格差が生まれました。そのような時代背景の中、松江は伝統的な文化や独自の地域色を温存し、後代につなげていきました。

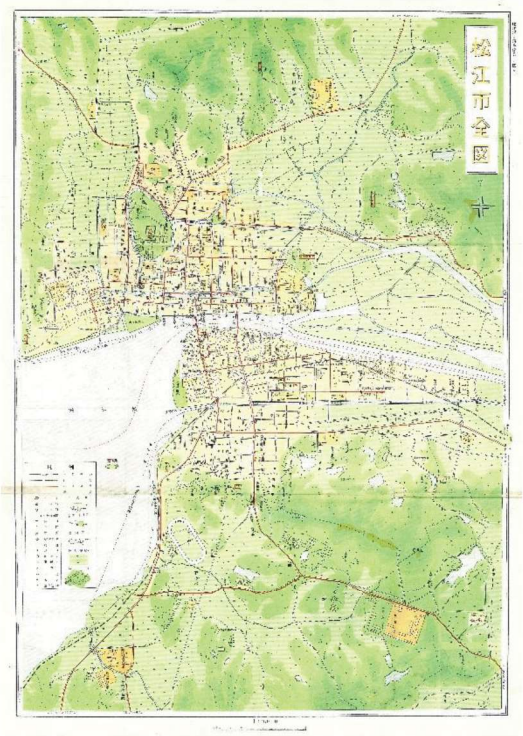
五本松公園から見た美保関港

明治時代においては天皇巡幸が熱望され、明治 34 年（1901）には島根・鳥取・山口の三県知事の連名で山陰地方への巡幸が請願されました。あわせて巡幸時の行在所の検討も行われ、八束郡宍道町（現：松江市宍道町）では江戸時代に本陣を務めた木幡久右衛門宅、松江市では松江城二之丸に行在所を建築する計画が立てられ、それぞれ明治 35 年（1902）と明治 36 年（1903）に完成しました。そして明治 40 年（1907）には、明治天皇の名代として皇太子嘉仁親王（後の大正天皇）による山陰行啓が実現し、松江城二之丸に建てられた 2 階建ての擬洋風建物（現：島根県指定有形文化財興雲閣）が宿泊所として、木幡家邸内に建てられた木造平屋の近代和風建物（現：重要文化財木幡家住宅（飛雲閣））が御昼餐所として使われました。

昭和 16 年（1941）から始まったアジア太平洋戦争では、松江周辺は機銃掃射を受けたものの、大規模な爆撃からは逃れました。松江城天守を始め、明治前期に建築された田野家住宅（旧田野医院）や大正 13 年建築の島根大学旧奥谷宿舎など、城下町や周辺地域の文化財や歴史的な環境は大きな打撃を受けることなく、現在につながっているものが多くあります。

７）戦後～現在

日本の近代は、日清・日露戦争からアジア太平洋戦争の終結に至るまでの戦争の連続でした。戦後、日本国憲法の制定や戦後改革が行われ、1950 年代後半から約 20 年にわたる高度経済成長を経て、日本は世界で最も発展した資本主義国の一つとなりました。一方で、人々の仕事、暮らし、ものの見方・考え方などが大きく変化し、現在につながっています。



昭和 29 年観光松江全図

松江市は、戦後から昭和・平成にかけて、県都として発展し、市街地も拡大しました。城下町の面影を残し、小泉八雲の文筆を通じて世界に知られた松江市は、戦前には道路や鉄道などの整備をするなど、観光遊覧都市としての基盤整備を進め、社寺や松江城などの文化的遺産、宍道湖をはじめとする自然地理的遺産を観光資源として、美保関から出雲大社をつなぐなど、各種の遊覧コースが作られていました。昭和 26 年（1951）には「松江国際文化観光都市建設法」が公布され、京都、奈良に次いで 3 番目の国際文化観光都市になりました。その後、昭和 48 年（1973）には伝統美観保存条例を制定し、松江城北側の小泉八雲旧居のある塩見縄手地区、普門院とその周辺地区を指定しました。

平成 17 年（2005）と平成 23 年（2011）の市町村合併を経て、古代以来、出雲地域の政治・経済・文化の中心地と、それを取り巻く関係の深い 1 市 8 町村が一つの市域となり、現在の松江市となっています。